



神金公民館だより

第178号

2025年
1月1日

あけましておめでとうござります



上小田原からの初日の出(2024.1.1)

新年明けましておめでとうございます。本年も、公民館活動へのご協力をよろしくお願いいたします。

2025年問題などが気になりますが、新しくやって来る2025年が、明るく笑顔に満ちた一年になってくれることを願っています。



神金振興会・第2回代表者会

12月5日に「神金振興会第2回代表者会」が行われ、地区内各組織の代表者の方々が40人ほど参加しました。討議に先立って、旧JA神金支所前から南側に延びる道路の拡幅において、土地を無償で提供していただいた榊原さんと矢崎さんに、区長会長から感謝状を贈呈させていただきました。



塩山北中学校演奏会

11月19日、塩山北中全生徒が参加した演奏会を開催しました。コンクールに出場した合唱部の合唱，吹奏楽部の演奏，全校合唱と素晴らしい歌声と演奏が公民館内に響き渡りました。

参加者された方々は、「北中の合唱と吹奏楽を聞き，楽しいひとときとなりました」「素晴らしい音楽を聞かせていただき，感動の涙を流しました」等の感想を述べていました。



◇塩北中生の地域ボランティア活動◇

ありがとうございました

11月28日，塩山北中生12名が，地域ボランティア活動として公民館の清掃をしてくれました。窓ふきやトイレ掃除などにてきぱき取り組み，あっという間に見違えるようにきれいにしてくれました。ありがとうございました。



神金の歴史

地元の歴史研究家でもある故飯島卓郎氏が、神金小学校PTA会報「ふもと」に執筆し寄稿した「神金の歴史」をシリーズで紹介します。

新青梅街道 十二

道路県令の異名を取った藤村紫郎は熊本の藩士の次男に生まれ勤王の志士として倒幕に参加、その後明治新政府に勤め大阪府参事から二十九歳にて山梨県令（知事）に任命され明治六年二月に着任した。若い情熱を燃やし産業・教育の振興に力を注いだが、特に道路の開発・振興に意欲を示した。

明治七年一月、今に残る有名な「道路開発告示」を発し全県民に訴えた。長文の告示内容は「本県は四面山のため物資の流通が不便である。如何に物産が豊かなりといえども、商売の機を逸するならば県民を貧困から救うことはできない。運輸の便を改善しなければ本県の繁栄は望むべくもない。東京・横浜に通ずる道路こそが必要である。幸いにこのことにつき、一・二の人この識を申し出により、試しに測量を行った。幸いなる哉、極めて平坦にて水害の恐れも少なく、この道こそ本県永世の繁栄・富殖の根源であり、これは本県だけの幸福ではなく、日本国の国益となるのである。然し乍ら工事は難工事であるので、県下人民協力し財ある者は財を出し財なき者は力を貸せ。この道が完成したならば人智は開け物産大いに興り、商業は盛大となり、県民子々孫々余栄を受け、併せて日本国富強の基礎を固めるものである。県下十三萬の人民よくここに着目して完成するために協力すべし」とある。以上は長文の告示を要約したものであるが、文中一・二の大とあるは、当時山梨郡第十七区（神金・大藤・玉宮）区長矢崎治兵衛（上小田原矢崎利接氏の曾祖父）と丹波山村戸長酒井賢佐である。

矢崎治兵衛は清信とも称し、第一回の県会議員にもなった大で県令とも相対して議論のできる傑物であったと言い伝えられている。一之瀬高橋部落や神金村の将来のため対局を考慮して建議したものと思う。東山梨郡誌にも「青梅街道開鑿は矢崎猜信之を主唱する」とある。

丹波山村戸長酒井賢佐は人の交流・生活物資や村の産物を大菩薩峠を越えての運搬では、丹波山村の将来はないことは痛感していた。嘉永二年（一八五二）黒川谷から葡萄沢の新道を着工したところ、甲州街道筋の宿場から訴えられて敗訴になって以来泣きの涙で諦めていたところ、矢崎治兵衛からの呼びかけに応じたものと思う。

*次ページに続く

神金の歴史

国の許可を得て着工はしたが、県令の若い情熱と旺盛な意欲はあったが資金難で苦勞した。県に財源はなく政府の助成も時局柄期待が外れた。先ず、受益関係の各村に負担金の割当てをしたが、神金村分は金参千八百五拾貳円貳拾六厘参毛で、最高額の大は金五十七円五十七銭の割当てを受けた。この割当てが過酷であったので、怨嗟の声もあったが受益者であり地元のためでもあり、問題はあったが完納したそうである。県令も自ら百円を献納して率先垂範の実を示し、権力を以て県下の資産家に対して献金を求めた。或いは騙し、或いは脅し、或いは罵り、或いは責め、あらゆる手段を使って集めたそうである。

藤村紫郎の性格か、或いは代官政治の強圧的でなくては治まらなかったのか、一般農民が無能であったのか、十四年間の任期中は県令の権力を以て県民に重圧を加え諸策を遂行した。そのため成功した例も多々あった。各村毎に小学校の開設、道路の開鑿、橋梁の修築等何れも献金に依存して成功した。又「物産富殖の告諭」を發して、「天は幸福を人に与えず、勤勉に与えるのである」と説き。県民の奮起と啓発を図った。産業の振興は目覚ましく特に養蚕・製糸業の発展は他県に比して大きな功績であった。

県令の在職期間が長く県民に飽きが生じ、失政も目立ち横暴・独善の批判が生じはじめた。折から自由民権運動、反对政党の結成等により反藤村の声も大きくなり威光も衰えてきた。明治十七年に大月・上野原地方の貧債農民二百五十人余が集会暴動化したのが県警の出動で沈静した。又明治十九年六月甲府の五つの製糸工場で、日本の歴史上最初のストライキが女工によって発生した。相次ぐ不祥事により明治二十年三月、愛媛県に転出した。

県下に告示を發し、青梅街道の重要性を説き、工事費の捻出に苦しんだ県令が、今地下にあって嘸満足していると思う。藤村県令の勞に感謝し心から冥福を祈る。



藤村紫郎